





花は〜 realer 花は〜  
はせわしなくとけく志を入致植ゆる老をいふすし  
いあす〜 花は〜  
よまははらわをれとけくはは〜  
ふぬひ〜 花は〜  
風の本れ葉を吹は〜  
は〜  
花は〜  
花は〜  
目わ〜 植〜

たのむあまの〜  
高良山をゆる桃青霊社を勧請して歌  
うらよる〜  
を〜  
花は〜  
蕉風吹おこ〜  
花は〜  
その〜

清集

法寶前よまのりをもたはつて礼

一茶

文化十年十月吉日

魚測

酒をふく枝杖うたふや菱書て

こころし掃心音戸れ入海

茶

あつあけのそりゆりもるるまきまき

梅一本を我世なりう茶

測

ふらんきし舞うて歌山うらたき

大福餅てふぬく猿人

茶

仇重れ罪なりしを晴まつけ

測

尻圍をものほふ猫も入る

、

の昔れはあゝ枝の涼し色

茶

連歌めをく萩色水

、

まてまはし三丑夜申れ右津賀

測

厚う切者よ下敷をう登

、

飯もよまのり具れ唱おとふ

茶

まろしあをて羽織着るこ

、

ちぬ花のあつしふ小淋し九

測

鳩よまのりをさす歌昔烟

茶

陽を孔鐘を法西のうぬきもや  
 ぬの敵見えよト新川をね  
 人お少ふ子代よりけりさちきり控  
 花もさくこをさく控んこ  
 三十日経汗たらしと赤のぬ院  
 ねれやふて膳をひ後ける  
 をのりまこ空のはりし花はさく  
 いて此浪の瀬もみいりてん  
 赤いふをぬのれ伯母の本控垣  
 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、

かまのちきりれさくうのぬ  
 泣賃の柳をいりはと並置  
 霞まよしうらろふ小  
 をのり化る柳を馬よいさくのを  
 いまこ体と人のよぬ鏡  
 木く鼻をこころさく西隣  
 目利の通りと夢さく赤  
 我神と祝ひはめよ花咲て  
 俳諧さやける花うらぬ  
 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、 茶、

桃青社



掟

一本横垣ふ馬はさく事

一登うれえとりよるやわはれしふ

するさ

一まこのれ根のゆきこふあふい船舟の

いふのえいこふわさしりふこととて

を海ぬはしこふさる事

一目よまこふまふ人ろゆりこるさうら

をふしうりて外の歌ふゆりハ吐

持る唾をすするよ何しと昔  
走りししこち建ても弥恃むし事  
一月並のまよ探歌名迹するり

右之啼く不守輩此神  
垣ふかしく入庭うらるるの地

月日

社賢魚淵

廣前ふて

鳥子や大き風口一あだめ終	松宇
昔のふてしつてきま一紫小	春甫
坂いぬしよあきれは海とまら風あ	二休
夕ふれの一際まぬとまられん風	呂芳
垣歎よ葉をばこひきり盆の月	箱伽
大菊は目とよいをうら紙衣か	松谷
山焼やいろくあ見ゆふ大橋	完芳
まのよをして縁をさるらん更衣	芦角

猿と鏡子に逢てまてぬく寺れ山 公常  
 ちる様いさゝくし多れ流来さや 掬斗  
 雪のまを前ていりうよをふの白 素鏡  
 うぬのまゆるまに月を十五日 雪士  
 薄のむれ中より月あり出出小 厭路  
 まゆ〜 文書人下宿の小春さや 雪丸  
 二月廿二日〜 雪丸 有妻  
 雪丸にさしすゝいさゝと夜う みる可  
 雪丸はまき〜 雪丸のまきするの清 舞涼

居るもの〜 小やや山家ののりう 程我  
 廿初刻の法とをいさや 涅槃像 魚沼  
 茶の苑やいさゝぬ茶の茶えさ 庸和  
 竹居士にこのくや 極音社をうけ〜 茶と常小  
 雪丸のまを前ていりうよをふの白 素鏡  
 うぬのまゆるまに月を十五日 雪士  
 薄のむれ中より月あり出出小 厭路  
 まゆ〜 文書人下宿の小春さや 雪丸  
 二月廿二日〜 雪丸 有妻  
 雪丸にさしすゝいさゝと夜う みる可  
 雪丸はまき〜 雪丸のまきするの清 舞涼

さ〜 雪丸をまらぬゆき 一茶



掛弓を梅入り木と書きしめしめて

魚淵

やうれき雪のほかりあり

雲士

五六人鼓をもち月をたのむ

春甫

おもしろいおもしろい徳甚

抽汁

さうやうおもしろいおもしろい

二休

やうそこの心 陸 鼻の高人

松宇

あやうきをいふれきいふれき

希林

おもしろいおもしろいおもしろい

煮鏡

おもしろいおもしろいおもしろい

完芳

おもしろいおもしろいおもしろい

夷耕

おもしろいおもしろいおもしろい

文路

おもしろいおもしろいおもしろい

公常

おもしろいおもしろいおもしろい

呂芳

おもしろいおもしろいおもしろい

測

象頭山大権現のほかりあり

鏡

おもしろいおもしろいおもしろい

士

梨翁

葛三

八朗

如毛

雲帶

武日

丑付

文路

春尾

及古

艸司

呂吹

可厚

慶英

思月

文雅

一枝

唐木

おけ者早梅川吉田 龍子吉田 素泉

雷れ強きふらぬを合致の志 巴十

をいれや月あふてすぬ熟し標 荅亭

米虫の氣むはしきや五力百 谷蘭

子親をれあふり志ぬぬら 九丘

うれきう見えぬのさき山嵐富子 みる丸

西ひのききぬの除入りアサ 竜ト

雪降やくしぬいぬいおしは 文虎

浅間しゆり入るりきき 栗之

音りして流るやうき龍の石村 白齋

梅をてや淋しきと遠く龍見えヨリ 冠山

おろりてふらふを控へて林の音南々 竜泉

るぬりて宿のほはほの寒きか 鶴年

新れ花山入り峰もて牛れさ 亀月

うの志や川はよぬれ序致の時 佐人

飯らり細物ふしきり東山 月山

松り戸や山さむいして春の味イミヤ 有僊

夕まやちきいカイン 春耕

うれ花やよむを 冥きき粉挽唄 女 成布

昔の影の屋根を ころもろの峰 指長

いづれかのさくらして 立雪解小 皐鳥

梅のついでいも花をさうらうり 二田中 希杖

汗うらや 烟を揺れば木のるす 其翠

さよれらーのたかひしよを海よこへは流して海を

ゆる甘満寺もゆきこゝろに流るるをゆきまの

けしきをゆきまの けしきをゆきまの けしきをゆきまの

かみゆきまの

象のいれかたを 極て呼ぶるる 一茶

相馬旧都

あけきりや 狩門のいさくし 蕉雨

いさくしより 住まはつぬきん花の宿 晝磔

あけきりや さらけいれきされを 若人

外ヶ濱

らしきうらまへ 見かねる 不樂の二首 一茶

新浮

きんされ唄て 飯くし 花女うれ 魚洵

山人の味噴 清くもむ 魚 魚淵

我のち梅ののりく 白 白飛

越後

丸盤のゆきな見ゆる 目風改 五文

投やりの隠きく 梅れゆ 亀 亀穴

何の物さきく 路 路文

本母きふ 行 行里

こししれい 石 石海

ほろきる 幽 幽情

陸奥

永き見れば 雨 雨考

菊の香や 百 百非

六浦

志くもや 冥 冥々

二人して 日 日人

別恋

無理りし 煮 煮郷

まれの白 卒 卒角

多由入の引也あうううくまふふ子

昨非

り形もううろ見えさうりあきこれ蟻

少緑

芭蕉忌

淋されをれさうれ我佛

乙二

月代ヤにまじりてけりきりし

お前布席

出羽

そりれきとそりてり山家

野松

茶上戸の世とそりたり杜若

可未

上野

下臨くちよいと引鏡はすまの如

鷺白

寒き日や浪より白を後波

月鶴

菊さくやあそを南もさうえん

浦入

木う〜や神といはるる里の犬

鹿太

古里一益〜ままあ〜そりてら

雪水

維令

女舞後のほろ〜横冥〜あく

茅磨

武藏

心は殿の花火もるるあ天の川

金令

閑室獨坐

日之るぬ本と藤花柳と見あひはく  
 空に一横露粒く木とを咲く子  
 いしかりも初の手を具見ぬありふ  
 喜け夜の園を杖をうらめぢぢぢ  
 梅の戸もあつち揚子とつらつら  
 武士とたのめ吼はく夜葉の丸  
 紀逸

十月十二日

この宿るも紙衣の音をなせ  
 一賦

入あひよあはひも守れまの餅  
 うれ志の宿る新卯も二ふり丸  
 片ゆの世と見えしてささき蓮の花  
 ばあゆむれ花よこしれ噴く草  
 大いよこし蓮見ゆをみかかし  
 竹等もこのうらめぢぢぢ川はこよ  
 朝れ間や西乃牡丹の大きき  
 芒のく傳出くまや五有あえ  
 新既のいさしき  
 長閑

長閑

魚正しよれ一物あてく暮暮花は花  
みちのくや菜の花百里又百里  
あはれよ庭らてまふぬ 林のまき  
筆や月夜詠ふいてあす下枝し  
山寺も月をさるるよも菜 粥の乳  
老鴉 鷹 孤山 芝山 雨籟

題西行上人

此にくふ位人あまされやう清き  
うよひあては亂れ猫とまふらり  
成美 對行

佛生會

灌して露よはあやうきおもをり  
十月のそよよはくちや瀬田に橋  
菜の花よ吹よめりうら目白く  
んをさるる角力もさるるふ音月夜  
あはれい風をさるるやばれと  
雪はよきうらまのくかすまの乳  
あはれして孝行歌の音の歌  
もあはれこのまよ相するあはれ  
二月もあはれいうつよ又うられ花  
秋耳 表丁 因村 鱗 免一 徐柳 蛙足 一瓢

雲水在知是坊

サ童



下総

むすぶあつて寒し吐しれらるる

太坊

うらむしのあつれ喰や志仲間

雨塘

いづれいづれいづれいづれいづれ

煮迪

蝶のあつていづれいづれいづれ

至長

天窓より雪解の音や養心堂

一白

兩國

虫をれあつて夜よ入るやうすい

月船

あつてあつてあつてあつてあつて

李峰

天坂より

白の橋やあつてあつてあつてあつて

斗園

あつてあつてあつてあつてあつて

官庫

瑞穂の芥よりあつてあつてあつて

蒼城

あつてあつてあつてあつてあつて

廣陵

あつてあつてあつてあつてあつて

金堤

あつてあつてあつてあつてあつて

双樹

あつてあつてあつてあつてあつて

美阿

あつてあつてあつてあつてあつて

鶴先

常陸

青柳ふ澄り夕の光に夜うね

湖中

新酒やむらりりり腕るる

里石

花吹雪あふまゝに春めをるる

松江

飛弾

夕立れそそくしむるる

備史

二存二度月ら出るとて秋て兒

乙老

上総

馬れをそそくしむるる

白老

石ころのまゝにふるる

雨十

あふまゝにむらりりり

子盛

うれをむらりりりり

徳阿

くつをむらりりりり

貞印

果れをむらりりりり

砂明

あふまゝにむらりりり

文東

新酒やむらりりり

ちら吉

町ころむらりりりり

立雅

あふまゝにむらりりり

輪之

安房

泥亀の妻子引こ落葉そこ  
 其文  
 ナ五日まゝ川や世間とを流のり  
 風至  
 汗の空ふむしりてさしうるの  
 都賀  
 七ノろえんちり中とあつらふ  
 簾九  
 梅の力あつらふとくちをのり  
 非枝  
 ちろ風や船の葉は陽よる  
 越  
 こまじとりの花をんそとれと皆すの山  
 杉長

相摸

猪はるひつ門あつとすやとされあき  
 稚啄  
 水一の梅力そつらそつら  
 煮拍  
 百人の百人集し鼻乃穴  
 支儿  
 具甲を賦し松魚をあつらふ  
 洞し  
 逢う忌や母噴るハ登を鳴  
 澧水  
 甲斐

甲斐

角力もあつらふはもめて具負ふ  
 可都里  
 山陰や柴力れまのさつし  
 重行  
 されふと入相はやまの葉  
 百二

うらふ守やあゝのひはれ一拍子

漫々

盃は月更けてけりよとありひきり

有斐

丹列

陽谷やよれききとらふ小田の鶴

武陵

しらぬやまの夜こふ美しき

六合

穂俣ふきり仕舞ひの枇杷花

馬吹

与佐の江や杉のそらけり雪の音

鷺八

尾張

短うのれおろしやあゝと階子賣

少汝

肩より出てくまの色をすれ蛙の歌

東陽

人あふくはれあふくはれむしを

逸人

春は夜や多岐よみほく人れり

路郭

田一板息りて来くはれ多新のそら

永齋

ちよとてたれはさらく寒さく小

梅間

父母れをきく人れり花さく

月庭

まらくふ山の鞍馬のあそび

金谷

い勢浦やんれ中しき時を

茂東

序のくはれあや白漏のけたるみ

黄山

旅をのぞぬあつてまきりまの冬  
一舟入るとれと掛ひぬさうの花  
ふれ月あるは見えれと人も掛ひ  
社堂  
茂推  
竹有

近江

きれ日と入や木の葉乃わくれ家  
序のまゝの止れつよわしきまじや  
嫁入の灯れうほりさり知の梅  
若とさふ花のふれとま結し  
申齋  
宇洋  
花陶  
芳之

合点して字をきくやとらんこそ  
切けりぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
丹波よりあれとつれて花甚  
うらみあやさやち梅の咲くさぬ  
旅くと様をきくやと夜さぬ乳  
亞後  
文常  
子歌  
夷雄  
于當

伊勢

家野のあつらけりさりけさの林  
ささのむのめあつらさるる  
丘高  
椿堂

まればみや小庭ありては秋の夕の危

其仙

志のこころの法代の月とて大梅の

菊所

三つおろし敷くよりの女市花

周終

京

能をいへその後をよめ鹿子所

蒼虬

くのこのれをよめけそり猫の志

芦涯

よ福をいひのこころひ音神一重

杜蓼

や曲てあやめりては秋の花

金茶

よ海しよよよとれよも梅志

定雅

しらぬ花をよめあやめりては秋の夕

其成

秋のわよめりあやめり秋の夕

雪雄

くよめよめよめあやめり秋の夕

瓦全

旅人

正月のよめりあやめりては秋の夕

白夜

うすあやめりあやめりては秋の夕

春漣

あやめりあやめりては秋の夕

能阿

あやめりあやめりては秋の夕

千阿

芭蕉一忌

世の情をよみてさうふえこれの古語に  
あそびにほろりとまればか  
舟ありと海ありのありすま

法然

空阿

本海

孫列

陽をよみてさうふえこれの古語に  
うゝこれの古語にさうふえ  
月をよみてさうふえこれの古語に

尺艾

長齋

米賣

世の情をよみてさうふえこれの古語に  
あそびにほろりとまればか  
舟ありと海ありのありすま  
世の情をよみてさうふえこれの古語に  
あそびにほろりとまればか  
舟ありと海ありのありすま

星諺

木花

稲丸

奇測

世の情をよみてさうふえこれの古語に  
あそびにほろりとまればか  
舟ありと海ありのありすま  
世の情をよみてさうふえこれの古語に  
あそびにほろりとまればか  
舟ありと海ありのありすま

万和

喜齋

未紀

古聲

安藝

甲はははまふんれは阿まま川  
 手やうしーしきのやしとらる日か  
 我植て三風氣よいらぬか  
 内ふ結るくせもは毒うー門飾  
 叱らまて目とささきさうり猫の玄ナカト  
 きののしは空さうりさゆせこれ穂カ  
 百人の物喰らひ踊よまゆゆの力  
 阿のうらまふ人のさうきま表あふサト  
 西坡 可友 敏英 篤老 羅風 甘谷 眉山 淇竹

九只

あさい山れ何ゆいけ青ナカサキまみのさう 菊也  
 川ふのそはまてまうりまま葉つそ 祥木  
 ささか白ふあさいさうくは 乳川ヒコ 岫丸  
 何さうらうはふさん終ふ文あさく 文曉  
 はさうや子さうのめさあは境の城ナクコ 文角  
 志うめくやれやんさうの 坂入 古道



窮死を志す事なる流るるれ

追加

工下 山城

十月二十日

冬より四十日ありし間の事

殊未

あはれ人向ふ此山王能本之方... 賑として... 思世乃卓敷... 又禮をといふ... 自ら免さ... 能申るも... みるも... ありき... 有るも...

陰のしら首まをちよつと汗を流しし人  
ほろこのまあしえやたほしめさむと思ふも  
このかひれぬといふみほるまをへそ人  
ふかもてちふと之同くこいそれも人かあは  
乃堪のそ活やこのもまをへそははそ人の  
そをそな我をそわの才權をと益を袖を

文化十二年十月十二日 信州長沼魚測誌

三韓人 巳刻 一茶  
一<sup>後編</sup>韓人 追刻 全

漏殿 追刻 全

迹祭 巳刻 魚測

杖祝 巳刻 松宇

萱塚 追刻 春耕

おらの世 追刻 文路

二僧塚 追刻 希杖

信州長沼内町 佐藤松益 魚測  
文通便所 江戸大傳馬場町 萬屋藤助

右定飛脚毎月七日出立

